

た。

捕虜番号「九九九」

愛媛県 大久保 正 一

私は捕虜番号が「九九九」でありました。数字が覚えやすかったせい、か今も忘れませんし、「九九九」を口にするのが当時のことが思い出され、ぞっとします。

私は、大正十二年十月十五日生まれて、地元の高等小学校を卒業し、村役場（当時は村でしたが三カ村合併、小田町になる）に就職し、その後、陸軍通信学校（神奈川県相模原町）に第八期生として入校しました。家業は建設業で、構成は両親・兄・私・弟・妹二人の七人家族で、兄は予科練七期生（昭和十七年東部ニューギニアで戦死）、弟は少年高射砲学校卒業後赴任途中、東シナ海で戦死しました。男三人中私一人が生き残りました。

私は陸軍通信学校第八期生として、昭和十五年十二

月に入校し、昭和十七年十一月に卒業、卒業と同時に関東軍司令部新京通信所に配属となりました。仕事は関東軍（今の中国東三省）内の各軍司令部との無線通信連絡と、大本営との無線通信連絡が主の仕事でした。その後、昭和二十年五月、安東通信所長を命ぜられ赴任しました。当時戦況は日本の優勢が伝えられ、国民も丸となり、必勝を信じ戦っておりましたが、六月も過ぎた頃、関東軍の参謀をされておられた某参謀（宮殿下）が急に東京の大本営に帰任されました。仕事柄何か不安を感じ、戦況の厳しさを感じた次第です。

八月九日、ソ連軍の参戦となり、事の重大さを無線通信電報の頻繁さで感じ、「ソ連は参戦しない」と信じていた日本の外交の甘さを、しみじみと感じました。

軍の無線電報は機密保持のため全部暗号による数字電報でしたが、八月十五日「ライライ」という緊急電報が飛び込み、それも「ナマナマ」という暗号電報でない、そのものずばりの電報が終戦の電報でした。信

じられない事の重大さに驚き頭の中が真っ白になりました。

軍司令部からの連絡が入り、「そのまま待機するよう……」とのことで、正直に毎日毎日待ち続けましたが、何の連絡もありません。毎日民間の人達が鴨緑江を渡って朝鮮へ逃げ帰る様子を見、「我々も満州に居たら殺される」というデマも飛び、相談をしました。が、馬鹿正直に、命令が出ないのに勝手な行動は出来んという結論で、そのままずるずると九月になりました。

九月のある日、連絡が入り、奉天（今の瀋陽）に集合ということでした。噂によれば集合して帰国らしいということ。小躍りして喜びました。他の部隊の方々と共に奉天に集合して、初めて敗戦の実感を味わいました。それはソ連兵による武装解除です。それでも帰国出来るといふ喜びを信じ何の抵抗もありませんでした。二週間ばかり日が過ぎた頃駅に集合し、無蓋車に詰め込まれ、北に向かって出発しました。帰国なれば南だが何故北に向かうのだろうか？ 不安に思っ

いますと、誰言うともなしに、ウラジオストク経由で帰るそうなの？ ということです。新京（今の長春）に着くと、しばらく待たされ有蓋車（貨物列車）に移され、寒さがちよつと楽になりました。十一月になって寒さが一段と厳しくなり、防寒服を渡されほつとしました。十二月になって再び移動、北へ北へと進み、十二月の中頃松花江を渡りソ連入りしました。

その頃になって、強制労働に使われるということがやつと分かりました。それでもソ連兵は、ダモイダモイ（帰る帰る）と嘘をついていました。バイカル湖を北に見ながら、西へ西へと一週間ばかり走って収容所近くへ着きました。駅へ着いても、収容所は歩いて半日くらいかかる所で、雪が二メートルくらい積もっている。雪かきをしながら進む有様で、二日ばかりかかってやっと収容所へ到着です。第七収容所ということで二千人くらいいたと思います。収容所に到着するまでに、寒さとひどい大勢の人が亡くなりました。軍医や看護兵もいましたが、手当ても薬も十分でなく、かわいそうでしたが、どうにもできませんでし

た。収容所で私の捕虜番号が「九九九」と聞かされ、胸に小さな金具をつけられました。

一日たつてから、炭坑で作業することになりました。三十分くらい歩いた所にある大きな炭坑で、地下三百メートルくらい入つての作業でした。三交代で働きました。生まれて初めての重労働でもあるし、腹がすいて、その上ソ連兵の監視が厳しく、ノルマがあつて、それはそれはこの世の地獄とはこのことかと思ひました。大勢の同胞が次々に倒れていきました。最初二千人くらいいたのが、千五百人くらいになったと思います。収容所の位置は確かではありませんが、クラスノヤルスカバルナウルではなかったかと思ひます。

一番苦しかったことは腹がすいてひもじかったことです。人間色々苦しいことは沢山ありますが、何と言つても腹がへつて、来る日も来る日もひもじいことが一番だと思います。ひもじさのあまり脱走して銃殺された者、食料倉庫に夜中盗みに入つて見つかり監獄に送られた者、毒キノコを食べて気が狂つた者、色々

おりました。食事はスープと高粱の粥、スープとパン等で、スープは野菜少々とジャガイモ少々の塩湯といたところ、パンは厚さ二センチ位一片でした。帰国前になつてから米粥が出ました。これには驚きましたが、涙が出るほど嬉しく感じた次第です。その時の短歌を一つ。

久々に上り来れる米粥を

拝みて食べし友もありたり

今、日本は経済大国、あらゆる物が豊富で贅沢になつています。食物においても然りです。昔のことを言う訳ではありませんが「○○は質素を旨とすべし」という教えの通り、終戦後の食糧難を思い反省する必要があると思ひます。

昭和二十四年五月頃、帰国出来るらしいという噂が立ちました。「またソ連のウソが始まつた」かと思ひましたが、だんだん本物らしい噂を耳にし、嬉しさのあまり抱き合つて喜び合いました。六月中頃いよいよ帰国の連絡が入りました。嬉しさと感激は今も夢のようです。六月の初め頃、ソ連に連行されたような有蓋

貨車に乗せられ、今度は東へ東へと進みました。パイカル湖を左に見ながら、十日くらいかけてナホトカの港に到着しました。久しぶりに見る海に喜び、そしてこの続きに日本があると思えば嬉しさで胸がいっぱいでした。ナホトカで一週間ばかりの日がたち、いよいよ乗船です！ 高砂丸と大きく書かれた船体に思わず合掌したのを覚えています。

六月二十四日に乗船したと記憶していますが、六月二十七日舞鶴港へ入港しました。緑に包まれた舞鶴が見えると、思わず「万歳万歳」と叫びました。

帰国してちょうど五十年の歳月が流れました。人生喜びあり、悲しみあり、苦しみあり、いろいろですが、舞鶴へ帰国第一歩を踏み締めたときが私の一番の喜びです。

帰国後、父の家業「建設業」を継ぎ、公職（町議会）も六期続けています。そして、陸軍通信学校八期会という会があり、毎年一回同期の集いがあります。入校した頃は十七、八歳の少年でした。歳を重ねお爺ちゃんになりましたが、毎年会って、昔のことや、捕

虜のときのこと、内地勤務の者のこと、話し合うことも楽しみの一つです。

色々とききました、記憶もまばらで、まとまらない点、お許しください。

抑留記

愛媛県 鹿島智夫

昭和十一年二月二十六日、東京近衛師団が武装して首相官邸を襲撃し事件を起こし、北満の孫呉に追放された部隊といわれている二〇二部隊に、私は十九年六月に入隊した。なだらかな丘を上って私はびっくりした。広い練兵場の高い塔に「鹿島台練兵場」と墨痕鮮やかな大文字が書かれているのである。私の姓と同じである。私は目を疑った。何という懐かしい文字であろうか。十メートル以上もある四角い、そして真っ白いこの塔は、夏の日に輝いている。何とも言えない誇らしい気持ちになる。ようし、俺は頑張るぞー、拳を